

2016 ソーシャルワーク、教育及び社会開発に関する 合同世界会議（SWSD 2016）に参加して ——国際的なソーシャルワークの動向から学ぶこと

泉 洋 一

〔抄録〕

「2016 ソーシャルワーク、教育及び社会開発に関する合同世界会議」（SWSD 2016）は、2016年6月27日から30日の4日間にわたり韓国ソウル市で開かれた。世界83か国から2,581人が参加し、メインテーマ「人間の尊厳と価値の促進」のもと、1,540に及ぶ実践と研究の報告がなされた。本稿では、会議の中核をなす6つの基調講演を要約して紹介し、その中でもマーク・ヘンリクソン氏による基調講演（アイリーン・ヤングハズバンド講演）から性的マイノリティの問題を福祉教育に位置づける意義について考える。

キーワード：SWSD 2016 人間の尊厳と価値の促進 ソーシャルワーク専門職のグローバル定義 性的マイノリティ

1. SWSD 2016 の概要

「2016 ソーシャルワーク、教育及び社会開発に関する合同世界会議」¹⁾（SWSD 2016）は、2016年6月27日～30日にかけて、大韓民国の首都ソウル市で開催された。本会議は、国際ソーシャルワーカー連盟（International Federation of Social Workers：IFSW）を始め、国際ソーシャルワーク学校連盟（International Association of Schools of Social Work：IASSW）、国際社会福祉協議会（International Council on Social Welfare：ICSW）の3団体による主催である。また、合同世界会議として隔年で開催され、前回は2014年オーストラリア・メルボルン（SWSD 2014）²⁾、そして今回は韓国で初めての開催となった。

SWSD 2016 は、ソウル市江南区にある三成洞の国際会議場 COEX で開かれた。本会議には、世界83か国から2,581人が参加、日本からも100人を超える関係者の参加³⁾がみられた。会議のメインテーマは、IFSW と IASSW、ICSW が共同で取り組んでいる「ソーシャルワークと社会開発のためのグローバルアジェンダ」⁴⁾の目標の一つである「人間の尊厳と価値の促進」が掲げられ、26項目にわたるサブテーマ（表1）も設定された。

また、SWSD 2016 では、4日間にわたり計1,540に及ぶソーシャルワーク及び教育、社会開発に関する実践や研究の報告がなされた。その内訳は、基調講演6、シンポジウム241、ワークショップ199、口頭発表774、ポスター発表320であり、合同世界会議としては過去最多の報告数を記録することになった。

なお、基調講演は、参加者全員が出席できるように他のプログラムと重複しない設定がなされ、シンポジウムは、「日韓ソーシャルワーク教育シンポジウム」のように国際的な共同プログラムが多数を占めた。なお、ワークショップや学術セッションでの口頭発表は、90分で5～6人の報告となるため、膨大な数のテーマの中から関心の領域を選びながら会場を駆け巡ることになった。

表1 SWSD 2016 のテーマとサブテーマ

テーマ「人間の尊厳と価値の促進」(Promoting the Dignity and Worth of People)	
サブテーマ	
1 社会的保護 (Social Protection)	16 災害及び環境変化 (Disaster and Environmental Change)
2 貧困 (Poverty)	17 ソーシャルワーク実践 (Social Work Practice)
3 健康及び精神保健 (Health and Mental Health)	18 地域開発 (Community Development)
4 人身売買 (Human Trafficking)	19 社会的行動 (Social Action)
5 暴力 (Interpersonal Violence)	20 国際ソーシャルワーク (International Social Work)
6 人権 (Human Rights)	21 安全 (Safety)
7 児童福祉 (Child Welfare)	22 企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility)
8 障害 (Disability)	23 住居 (Housing)
9 男女共同参画 (Gender Equality)	24 更正 (Criminal Justice)
10 高齢化 (Ageing)	25 人的サービス技術 (Human Service Technology)
11 持続可能性 (Sustainability)	26 その他 (Others)
12 人口の変化 (Population Change)	
13 移住 (Migration)	
14 労働 (Labor)	
15 教育及び訓練 (Education and Training)	

2. 波乱の幕開けとなった開会式

6月27日の開会式は、波乱含みの幕開けとなった。冒頭のアトラクションの後、朴槿恵大統領と国連事務総長の潘基文氏のビデオメッセージが流された。続いて、韓国政府の代表が挨拶をした直後、電動車イスに乗った障がい者と支援者の小集団が講堂になだれ込んできたのである。会場全体が騒然となる中、支援者がピラを撒き、電動車イスの数人が舞台へと続くスロープを猛スピードで駆け抜けていく。しかし、それを阻止しようとする警備員との間で小競り合いとなり、怒声と泣き声が交差する中、電動車イスごと会場の外へ強制排除されてしまった。

講堂全体に重苦しい空気が漂う中、司会者による謝罪はあったものの、詳しい説明はないまま主催者による挨拶やグローバルアジェンダの第2次報告の説明などが続いた。しかし、会場から一人の参加者が立ち上がり、先程の事態への対応に対する異議申し立てがなされ、開会式は中断された。筆者が聞き取れた範囲では、デモ隊を強制排除したことが大会テーマ「人間の尊厳と価値の促進」を踏みにじる行為ではないかというものであった。

これに対して、IFSWのルース・スターク会長は、「私たちはサービスを利用する人たちが自分の声を人々へ届けようとする姿を見た。私たちは、対話のできる環境を創造し、その訴え

を聞くことが責務である。ソーシャルワーカーを始めこの領域で働く人は、人間の尊厳と価値の促進が使命であり、デモンストレーションの人たちがこのような方法をとらなくても人々にその声が伝わるようにすべきである」⁵⁾と回答した。

筆者がデモ隊の訴えの内容を知ることができたのは、その日のうちに英紙ガーディアン（電子版）に記事⁶⁾が掲載されたからであるが、それは韓国の障害等級の簡略化に伴う年金支給の制限に対する抗議行動であった。

なお、この異議申し立てに対して、主催者団体ではその対応への議論が続けられ、最終日の閉会式直前に緊急企画が設定された。初日に強制排除された障がい者のデモ隊が、今度はプレゼンターとして壇上に上がり、抗議行動の趣旨を説明する機会が保障されたのである。また、同時に上映されたビデオ映像には、障害者施策の変化に伴って生活困窮に陥り、自殺した仲間たちの報告もあり、改めてその深刻さを伺い知ることができた。

写真1 最終日に壇上から報告する障がい者のデモ隊



2016年6月30日 筆者撮影

3. 基調講演から読み取れるソーシャルワークの課題

SWSD 2016の基調講演⁷⁾は、6月28日～30日の3日間、いずれも午前10時から11時40分までの70分間を2人のプレゼンターが報告する構成であった。6人のテーマを表2にまとめているが、いずれも現代社会の混沌とした状況と社会問題を鏡のように映し出したテーマである。

1) 基調講演 1-1：国際人道支援におけるソーシャルワーク（6月28日）

基調講演1の第一演者であるイ・イルハ氏の講演テーマは、「人間の価値を促進することにより良き世界を作る－NPOの役割と挑戦」である。イ氏は、既存の国際的な人道支援システムの弱点、すなわちサービスを受動的な利用者に供給する人道的救済モデルを、非営利組織（NPO）が利用者の積極的な参加を促し、集中的な社会開発や持続可能な活動へと転換させたことを指摘した。

表 2 基調講演のテーマ

基調講演 1 (6 月 28 日)
①人間の価値を促進することでより良き世界を作る –NPO の役割と挑戦 イ・イルハ (グッドネイバーズ・インターナショナル会長、韓国)
②開示のメリット –HIV への差別を終わらせるための一歩 ロミー・マティス (ベルン・エイズ支援&ルツェルン・センチレフ会、スイス)
基調講演 2 (6 月 29 日)
①ラテンアメリカ・カリブ海地域における政治、民主主義とソーシャルワーク シルバーナ・マルティネス (IFSW ラテンアメリカ・カリブ海地域代表、アルゼンチン)
②壁にぶつかる波 –国際移住とソーシャルワーク エイビー・タッセ (教育研究省顧問、コモロ諸島)
基調講演 3 (6 月 30 日)
①人間の尊厳と価値の促進 –ソーシャルワークの特権 マーク・ヘンリクソン (マッセイ大学准教授、ニュージーランド)
②現代情報社会におけるソーシャルワーカーにとっての挑戦と機会 ジョン・ファン (香港ソーシャルサービス協議会事業責任者、香港)

この基調報告の主題は国際的な人道支援にあるのだが、筆者はこれまでソーシャルワークを国際人道支援の観点から考えたことがなかっただけに、海外でのソーシャルワーク専門職の活躍の場の広さに驚いた次第である。

2) 基調講演 1-2: HIV とソーシャルワーク (6 月 28 日)

第二演者のロミー・マティス女史の講演テーマは、「開示のメリット–HIV への差別を終わらせるための一歩」であり、その報告は筆者が最も共感できた内容であった。世界中の HIV 感染者 3,700 万人のうち、多くの感染者への差別や偏見が懸念される中、ソーシャルワークや教育、社会開発が HIV とともに生活する人々の尊厳と価値を回復する上で重要な役割を果たすと述べ、自らが HIV 感染者であることを開示。また、HIV 感染者には秘密を保持する権利がある反面、開示することで人々の意識変容を促し、差別や偏見を是正する可能性に触れ、そのためのサポートシステムの開発や仲間（ピア）の存在が重要であると情緒豊かに報告された。

HIV 感染者への偏見や差別の実態は、日本においても広く認識されている。このような偏見や差別に対する社会変革のためのソーシャルワークは、筆者がこれまで関わってきた精神保健福祉領域での方法論と重なるところが多い。今後は、ソーシャルワーク実践の狭い領域を超えて幅広く連帯することが重要であると感じた。

3) 基調講演 2-1：民主主義とソーシャルワーク (6 月 29 日)

基調講演 2 の第一演者シルバーナ・マルティネス女史の講演テーマは、「ラテンアメリカ・カリブ海地域における政治、民主主義とソーシャルワーク」である。IFSW の地域代表を務めるマルティネス女史は、ラテンアメリカとカリブ海地域が世界中で最も不平等な地域であることを強調、それが帝国主義による歴史的な介入の爪痕であることを指摘。また、不平等は資本

主義的、家父長的、植民地的な社会的秩序からもたらされており、1970年代からの経済のグローバル化と新自由主義経済の強化の過程で、社会格差が一層深刻化し、飢餓や栄養失調、貧困、失業、排除、暴力などが拡大したという。このような中、社会的解放のプロセスが必要であり、社会変革を担う専門職であるソーシャルワーク専門職は、政治への関与が不可欠であり、いまやソーシャルワークの中立性は幻想に過ぎず、私たちの専門的な実践は常に政治的立場を反映していると力強く結ばれた。

これまで日本のソーシャルワーク教育では、政治への関与を意図的に避けてきた感がある。ソーシャルワークの方法論に焦点が当てられてきたからだと考えられるが、「人権と社会正義」をその実践の基盤とするソーシャルワーク専門職であるならば、社会開発や社会変革のための実践は、政治と切り離して考えられるわけではない。マルティネス女史の指摘をどのように教育に取り入れていくのか。これからの社会福祉教育の方向性をも問う報告であった。

4) 基調講演 2-2：難民とソーシャルワーク（6月29日）

第二演者のエイビー・タッセ氏の講演テーマは、「壁にぶつかる波－国際移住とソーシャルワーク」である。地域社会に様々な影響を与える移住や移民、難民に対する政策は、今日の国際社会の中心的な課題であり、とりわけ第2次世界大戦以来、最も難民の問題が目撃されているという。国際移住機関（IOM）は、2000年以來4万人もの移民の命が奪われたと報告しており、移民や難民が殺されない日はないと訴えた。一方、アメリカとメキシコの国境では、日常的に不法移民が権利侵害にさらされており、巨大な壁がその移動を拒んでいる。講演テーマの「壁にぶつかる波」とは、移住に対する国家レベルの抵抗や偏見、差別を壁と表現し、その壁に押し寄せる移民や難民を波と表現したのだ。そして、女性や子どもの保護が喫緊の課題であり、移住の自由を尊重することは権利擁護であると。移民や難民への人道支援の国際的な組織化と連携が重要であると主張した。

タッセ氏の報告を聞きながら、2016年3月15日にジュネーブで開かれた IFSW ヨーロッパ地域における世界ソーシャルワークデイのテーマ「難民と移住者：ソーシャルワークの役割」⁸⁾を思い出した。まさに本講演と重なるテーマであり、とりわけ EU のソーシャルワーカーが我が身を賭して難民を支援している姿とソーシャルワーク専門職のグローバル定義をその実践の旗印にしている困難な状況を想起させる内容であった。

我が国の難民申請が2011年から増加傾向にあり、2015年には7,586件⁹⁾に達し、過去最多となった状況を知る人は少ない。また、移民や難民に対するソーシャルワーク実践については、国内の法制度が未整備の中で民間の支援団体がネットワークを駆使しながら市民運動として取り組む状況下にある。このような社会問題を掘り起こし、移民や難民の尊厳と価値を促進するソーシャルワーク実践を福祉教育の中に取り入れる必要性を感じる講演となった。

5) 基調講演 3-2：ICT とソーシャルワーク（6月30日）

基調講演3の第一演者マーク・ヘンリクソン氏は後述するとして、第二演者のジョン・ファ

ン氏の講演テーマは、「現代情報社会におけるソーシャルワーカーにとっての挑戦と機会」である。報告では、情報通信技術（ICT）の発達为社会に大きな変革をもたらしていることに着目し、ICT とソーシャルワークとの関係性を整理しようと試みた点でとてもユニークであった。ICT に対する肯定的な意見と否定的な意見があるものの、今後ますます技術革新がなされる過程で ICT とソーシャルワークを切り離して考えることが困難であり、積極的に活用を図るとともに、「社会的な文脈の中で人をとらえる」という固有の視点の維持が重要であることを強調した。

今日、ICT の急激な発達とともに、人工知能（AI）の活躍が取りざたされている。これらの技術革新によって、未来のソーシャルワーク実践がより豊かなものへと変化を遂げるのか、それともソーシャルワーク自体が人工知能に取って代わられるのか。技術革新が続いてもなお深刻化する格差や貧困の状況を見るにつけ、ICT 活用への疑問が湧いてくるテーマとなった。

また、ファン氏の報告からソーシャルワーク実践の未来を見据えた教育の方法論が必要であることを考えさせられた。テクノロジーが貧困を解決する手段になり得ていない現状を考えるならば、コンピューターなどの技術革新が人間の仕事を奪っていく可能性を指摘したオックスフォード大学のオズボーン准教授の指摘¹⁰⁾が現実となる可能性もある。人類の歴史がそれを証明しているように、社会的弱者がその標的になることが予測される。このような事態に私たち社会福祉教育に携わるソーシャルワーク専門職はどのように立ち向かえばよいのだろうか。

4. 基調講演 3-1：性的マイノリティとソーシャルワーク（アイリーン・ヤングハズバンド講演）

これまでの基調講演で語られた課題や社会問題は、今まさに世界のソーシャルワーカーが直面している問題であり、我が国の社会状況にも大いに当てはまる。このような国際社会の変化のなかで、人間の尊厳と価値を促進する方向に舵が切られているとは言えない政治状況がある。国際社会の大きな荒波の中でソーシャルワーカーがそのアイデンティティをどこに置くの

写真2 マーク・ヘンリクソン氏によるアイリーン・ヤングハズバンド講演



2016 年 6 月 30 日 筆者撮影

かを迫られていると感じた講演であった。

その中でも筆者の意識を根底から変えたのが基調講演3の第一演者マーク・ヘンリクソン氏（マッセイ大学准教授）の問いかけであった。講演テーマは、「人間の尊厳と価値の促進－ソーシャルワークの特権」¹¹⁾であり、本講演はソーシャルワーク教育の発展に多大な貢献をした英国ヤングハズバンド女史を記念して「アイリーン・ヤングハズバンド講演」と銘打った特別な講演である。そして、その名誉な講演を行う初めてのゲイであることをカミングアウトすることから報告が始まった。

性的マイノリティといわれる LGBT-IQ¹²⁾が主題であるが、ソーシャルワークが直面している多様な問題（難民やテロリズム、不平等、貧困など）の中で、なぜこの問題を取り上げるのかという理由に、性的マイノリティの人が社会から抑圧され、他の重要な問題に目が向けられがちであることを指摘した。

また、性的マイノリティの人と出会った時に、どのような代名詞を使うべきかは直接聞いてほしいと訴える。外見で判断するのではなく、先入観を持たずに関わってほしいと。加えて、これまで60年にわたり世界中の性的マイノリティの先達が、社会と対話することで道を開いてきたことに畏敬の念を持つとともに、その反面、社会的排除のなかで多くの性的マイノリティの命が奪われてきたことを、一人ひとりの事例をもとに報告された。

また、同性愛などの性的マイノリティを国家が法律で罰するという現実があり、例えばイギリス連邦加盟の53カ国のうち、38カ国¹³⁾では未だに同性愛を否定する法律を有している。さらに世界の72カ国の法律では、同性愛者というだけで逮捕や投獄、なかには拷問が許されることがあるという。そして、次の10カ国では、同性愛者に死罪を適用する法律が残されているというのだ。

表3 同性愛者に死罪を適用する国¹¹⁾

アフガニスタン、イラン、イラク、モーリタニア、パキスタン、カタール、サウジアラビア、スーダン、イエメン、ナイジェリアの一部

現に南アフリカのレズビアンは世界のどこよりも性的搾取を受けやすく、カナダのバイセクシャルの半数が自殺を考えているか、または自殺を試みている。また、カリフォルニア州では2008年に15歳の中学生が同性愛を理由にクラスメートから銃撃されて死亡。同州では、2013年に8歳の子どもが同性愛を疑った両親により殺されている。また、中東でイスラム過激派の民兵が同性愛者の男性をビルの屋上から投げ落とす映像がニュースで流されるなど、性的マイノリティの人への差別や偏見、虐待、殺人は後を絶たないと訴える。

さらにはフロリダ州オーランドでは、本年6月半ばにイスラム過激派を信奉した男がナイトクラブで性的マイノリティの人々に発砲し、49人を射殺、53人を負傷させるという米国史上最悪の銃乱射事件¹⁴⁾が起きている。

また、2008年1月から2015年12月までの間、65カ国で2,016人ものトランスジェンダーの人が殺されており、そのうち、1,500人は北米と南米の人たち（ブラジル803人、メキシコ229人、アメリカ132人）であるという。また、ブラジルでは、2016年の最初の26日間で57人のトランスジェンダーが殺害されていることも報告された。

静まりかえった会場で、ヘンリクソン氏は聴衆に語りかける。人間の尊厳と価値を促進するとは、いかなることなのか。そして、ソーシャルワーカーは何をすべきなのかと。ここでいう人間は、いかなる性的指向や性別を問わず、すべての人間の尊厳と価値を指すものである。しかし、性的マイノリティの人々の尊厳は、世界中で抑圧され、排除され、その価値は危機に瀕している。ソーシャルワーカーは、このような社会状況を変革する力を有しており、誤った社会的規範に挑戦する力を有しているはずなのだ。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義にあるように、社会的正義や人権、多様性の尊重を実践の中核に置く専門職であるならば、その役割は明確であると。

最後に、今ここに集まったソーシャルワーカーの皆さんが自国に戻り、性的マイノリティの問題を学び、省察し、人間の尊厳と価値を促進するための多様な実践を深めてほしいと結ばれた。

ヘンリクソン氏の感動的な講演を受けて、会場は嵐のようなスタンディング・オベーションに包まれた。筆者自身も性的マイノリティに対する捉え方が根底から変わる講演となった。日本に帰国してから社会的排除の状態に置かれている性的マイノリティへのソーシャルワーク実践を行動に移すことを心に誓った貴重な体験であった。

5. 福祉教育に性的マイノリティの問題を位置づける意義

2014年7月オーストラリア・メルボルンのIFSW・IASSW総会で採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」¹⁵⁾では、ソーシャルワークは「社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である」とされた。

また、ソーシャルワーク専門職の中核となる任務の中で、ジェンダーや性的指向などに基づく抑圧に言及しており、「構造的障壁や個人的障壁の問題に取り組む行動戦略を立てることは、人々のエンパワメントと解放をめざす実践の中核をなす」とされている。加えて、ソーシャルワークの原則では、「人間の内在的価値と尊厳の尊重、危害を加えないこと、多様性の尊重、人権と社会正義の支持」とある。とりわけ「女性や同性愛者などのマイノリティの権利（生存権さえも）が文化の名において侵害される場合」があることを指摘している。

ヘンリクソン氏の講演だけでなく、基調講演の多くが社会の構造的障壁としての不平等や差別、搾取、抑圧について言及しており、この問題が未だ解消されない状況を問題提起し、ソーシャルワーク専門職の具体的な行動と実践を促すものであった。

性的マイノリティへのソーシャルワーク実践は、日本においても法制度が確立しておらず、公的な相談窓口も市町村レベルで模索している状況下にある。また、性的マイノリティへのソーシャルワークを実践している専門職も少数である。それは教育機関においても同様であり、本学の社会福祉教育のなかで性的マイノリティの問題が事例として取り上げられることはあっても、教育理念の中核に位置づけられているわけではない。

しかし、性的マイノリティの問題が少数者の問題として語られることが続く限り、その集団は自らの構造的な障壁や抑圧、偏見、差別に気づく機会を失うことになる。加えて性的マイノリティの問題は、ハンセン病回復者や精神障がい者、そして路上生活者等に対する社会的排除の歴史と同様に、差別や偏見、抑圧に対するソーシャルワーク専門職の社会変革への関与や行動を促す教育テーマとなり得る。

また、性的マイノリティの問題を福祉教育に位置づけることで、学生が自らのセクシャリティやジェンダーの問題に向き合う機会となるだけでなく、内なる偏見や差別意識に気づき、ソーシャルワークの価値をその内面から醸成することにもつながるであろう。

6. まとめにかえて

2016年7月に起きた相模原障害者施設殺傷事件¹⁶⁾では、19人もの尊い命が奪われ、27人が重軽傷を負った。障がい者というマイノリティに対する偏見や差別から生まれた問題と言える。ヘンリックソン氏が報告された問題は、決して遠い国の問題ではなく、現に私たちの社会が抱えている構造的な障壁なのだ。だからこそソーシャルワーク専門職は、「社会正義や人権」、そして「多様性の尊重」といった普遍的な価値や原則をもとに、人々の意識変革や社会改革を促す行動を求められている。

最後に、SWSD 2016に参加して、日々の教育実践やソーシャルワーク実践を根底から見つめ直す機会を得た。まずは、筆者自身がソーシャルワーク専門職の養成教育に性的マイノリティの問題を明確に位置づけ、「人間の尊厳と価値を促進する」教育方法やソーシャルワーク実践の開発に努力を続けたいと思う。

注

- 1) World Conference on Social Work, Education and Social Development 2016
- 2) 2014年7月にオーストラリアのメルボルンで開催された SWSD 2014 では、IFSW 及び IASSW の総会で新たな「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」が採択された。
- 3) 「『IFSW 総会』『ソーシャルワーク、教育及び社会開発に関する合同世界会議』韓国・ソウルにて開催」『日本社会福祉士会ニュース』No.181（2016年9月）
- 4) IASSW, ICSW, IFSW (2016) Global Agenda for Social Work and Social Development: Second Report; Promoting the Dignity and Worth of Peoples (<https://www.iassw-aiets.org/global-agenda/>,

2016. 7. 17).

- 5) Rory Truett (2016) Social work conference protest was a chance to put principles into action: At an international conference, disabled activists were dragged violently away from the stage where a minister was speaking. But their voices were heard. The Guardian, 5 July (<https://www.theguardian.com/social-care-network/2016/jun/27/disabled-protesters-social-work-conference-seoul>, 2016. 7. 17). Tuesday 5 July 2016 12. 25 BST.
- 6) Ruth Hardy (2016) Disabled people stage protest at world social work conference: International conference in Seoul halted when people took to the stage during health minister's speech to protest against disability rating system. The Guardian, 27 June (<https://www.theguardian.com/social-care-network/2016/jun/27/disabled-protesters-social-work-conference-seoul>, 2016. 7. 17) Monday 27 June 2016 16. 57 BST.
- 7) 基調講演に関する記述は、筆者の聞き取りメモ及び録音データ、そして SWSD 2016 ホームページ上に公開されている ABSTRACT (http://swsd2016.org/swsd2016_final/html/home.html) を参考に行っている。
- 8) World Social Work Day March 15 th, 2016, Geneva; Refugees and Displaced Persons: The Role of Social Work (<http://ifsw.org/world-social-work-day-2016/>, 2016.7.17)
- 9) 法務省入国管理局「平成 27 年における難民認定者数等について (速報値)」(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00111.html, 2017. 02. 08)
- 10) Carl Benedikt Frey and Michael A. Osborne (2013) THE FUTURE OF EMPLOYMENT: HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION? (http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The_Future_of_Employment.pdf, 2016.7.17)
- 11) Mark Henrickson (2016) Promoting the dignity and worth of all people: The privilege of social work, 30 June 2016, COEX, Seoul. (http://swsd2016.org/swsd2016_final/papers/PLENARY/PL03-01.pdf, 2016. 7. 17) (<https://www.iassw-aiets.org/wp-content/uploads/2016/07/EY-Presentation.pdf>, 2016. 12. 5) ([https://www.iassw-aiets.org/files/younghusband/EYL%20Presentation%20 \(text\). pdf](https://www.iassw-aiets.org/files/younghusband/EYL%20Presentation%20(text).pdf), 2016. 12. 5)
- 12) LGBT-IQ は、Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Intersex and Queer persons の略称であり、性的マイノリティ (Sexual and Gender Minorities) の人たちがよく使う言葉である。
- 13) ボツワナ、カメルーン、ガーナ、ケニア、マラウイ、ナミビア、ナイジェリア、セイシェル、シエラレオネ、スワジランド、タンザニア、ウガンダ、ザンビア、バングラデシュ、ブルネイ、インド、マレーシア、モルディブ、パキスタン、シンガポール、スリランカ、アンティグア・バーブーダ、バルバドス、ベリーズ、ドミニカ、グレナダ、ガイアナ、ジャマイカ、セントクリストファー・ネイビス、セントルシア、セントビンセント・グレナディーン、トリニダード・トバゴ、キリバス、パプア・ニューギニア、サモア、ソロモン諸島、トンガ、ツバルの 38 カ国である。

Mark Henrickson (2016) British Commonwealth nations that retain colonial anti-homosexuality laws
(<https://www.iassw-aiets.org/wp-content/uploads/2016/07/EY-Presentation.pdf>, 2016. 12. 5)

- 14) 本事件は、性的マイノリティに対するヘイトクライム（憎悪犯罪）であり、オバマ大統領も事件の翌日、下記のような見解を表明している。ヘンリックソン氏は死亡者数を49人と報告したが50人の誤りである。「50人死亡のオランダ乱射は「テロとヘイトの行為」=オバマ米大統領」『BBC News Japan』2016年6月13日（<http://www.bbc.com/japanese/36514143>, 2016. 12. 5）
- 15) 本定義は、社会福祉専門職団体協議会と（一社）日本社会福祉教育学校連盟による協働作業により2015年2月13日に日本語定義として確定した。
- 16) 本事件は、ヘイトクライム（憎悪犯罪）と捉えるべきであり、その根底には容疑者の優生思想があると思われる。しかし、国の対応は、事件の検証と再発防止を検討するチームの設置だけであり、12月8日に公表された同チームの報告書には、措置入院と措置解除後の支援の強化という名の監視体制が導入されることになった。池田小事件と同様に精神障害の問題に矮小化することで、事の本質を見失い、社会全体で考える機会を奪ったと言える。

付 記

※SWSD 2016への参加申込みの過程で、本学が国際ソーシャルワーク学校連盟（International Association of Schools of Social Work: IASSW）に加盟していないことが判明した。筆者は、公益社団法人日本精神保健福祉士協会の正会員であり、同協会が国際ソーシャルワーカー連盟（International Federation of Social Workers: IFSW）に団体加盟していることから事なきを得たが、社会福祉教育に軸足を置く大学としてIASSWへの加盟を切に望むものである。

※多様な性を生きる人の呼称について、本稿では「性的マイノリティ」という言葉で表現したが、一般的に「セクシュアル・マイノリティ」（略してセクマイ）や「LGBT」、「性的少数者」などの言葉が用いられており、いずれの言葉も社会に定着しているとは言い難い。また、電通ダイバーシティ・ラボによる「LGBT 調査 2015」では、「LGBT 層の比率は7.6%」との調査結果も示されており、マイノリティ（少数者）という表現も今後の調査によっては否定される可能性も出てきた。筆者としては、多様な性を生きる人を肯定的に捉えることのできる呼称を当事者や支援者が中心となって社会へ普及啓発されることを期待したい。

（いずみ よういち 福祉教育開発センター）